

隸省、離古文津、从舟淮、按當是、从舟、作津、離古文津、从舟淮、按當是、从舟、

〔爾雅註疏序〕夫爾雅者、略中誠九流之津涉。六藝之鈴鍵、略中疏津涉之處、濟

〔段注說文解字〕水十一上、灤、小津也、謂渡之小者也、非地大、从水橫聲、戶孟切、按玉篇、戶統、一曰、巨船渡

也、方言曰、方舟謂之灤、郭云、楊州人呼灤、音橫、廣雅灤、筏也、津

〔日本書紀〕欽明三十九年四月乙酉、越人江淳、臣裙代、詣京奏曰、高麗使人辛苦風浪、迷失浦津、任水漂

流、忽到著岸、

〔釋日本紀〕秘訓浦津

〔令集解〕職四員、津濟、古記云、上子鄰反、論語使子路問津焉、鄭玄曰、津濟渡處也、略中凡泊處謂津、

〔令集解〕營三十、穴云、津謂泊船處、令无妨障也、

〔東雅〕地三、津、義不詳、古語にツといひしは、あつまるの義なり、されば集の字讀て、ツとも、ツム

とも、ツメとも、アツム、アツマルなどいふなり、津とは舟船の集る所なれば、ツといひしなるべし、

アツムといふアは、發語の詞なり、著の字讀てツカルといふ、日本紀に、津の字トマリと讀しは、船舶

の止る所なるが故也、

〔倭訓栞〕前編十六、津、津濟のつは、人のあつまるよりいひ、口津のつは、唾のあつまるよりいへり、

集、字をつとも、つめともよめる是也、

〔古史傳〕十七、津字も、都と云言も、もと船の泊る所の名なれば、それより轉じて、津液の津をも都と

は云か、

〔燕石雜志〕一、物の名

津は船の通ずる處なれば、通歟、萬葉集に、川をもつとよめり、今人の書く假字のつは、川の草なり、

〔烹雜の記〕前集下、先板の訛舛